

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520461

研究課題名(和文) 諸言語における二重母音と二重母音化の普遍性と類型論的一般性の研究

研究課題名(英文) A cross-language study of diphthongs and diphthongization: common features and generalizations

研究代表者

渡部 眞一郎(WATANABE, Shinichiro)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：90116145

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：諸言語における多様な二重母音と二重母音化の普遍的特徴、類型論的な一般性について多くの言語事例に基づき特定した。まず、数多くの言語の二重母音と二重母音化のデータベースの作成および二重母音の生起と変化に関わる様々な通時的変化、過程の分類により、いくつかの普遍的特徴を抽出した。それらの特徴が、個別言語の二重母音を含む母音体系の変遷について分析をすることにより、妥当であることを検証した。さらに、現在進行中の二重母音の推移の調査分析を行った。ロンドン英語にみられる二重母音の発音が、世代差により一貫した違いがあることを実地調査により示して、その二重母音推移について通言語的一般性に照らして考察分析した。

研究成果の概要(英文)：I have identified some universal or cross-linguistically common features concerning diphthongs and diphthongization by drawing on linguistic facts and problems related to them. The findings are initially based on the database of diphthongs in a variety of languages and the classification of those diachronic processes which yield or affect diphthongs. Then, they are confirmed by the analyses of the evolution of the vowel system including diphthongs in some specific languages. I have also studied the ongoing diphthong shift observed in London English. On the basis of the interview recordings I made in London, UK I have found that there exist some consistent differences in the pronunciation of diphthongs between the older and the younger generation. I have analysed this ongoing diphthong shift and provided its implication in the cross-language study of diphthongs and diphthongization.

研究分野：言語学

キーワード：音声学 音韻論 通時の研究 通言語的研究 二重母音 二重母音化 ロンドン英語 類型論

1. 研究開始当初の背景

(1) 二重母音とこれを生み出す二重母音化に関する体系的な研究は研究開始当初、国内、国外においても存在していなかった。1970年代において二重母音を弁別素性に基づいて分析する試みや自然音韻論の枠組みでの二重母音と二重母音化の研究がみられたが、研究開始当初はまだ当時の研究の域を出ていなかった。この学問状況は、ひとつには構造主義において二重母音を単なる母音の連鎖と捉えた考え方や生成音韻論において二重母音を単母音から派生したものとしてきた学問の流れのなかで、二重母音が母音体系の基本的部分を構成しないと考える考え方が受け入れられてきたことが起因となっていると言える。しかしながら、この考え方は現代英語におけるいわゆる i-glide や u-glide を含む二重母音に基づいたもので、偏りがある。正しく二重母音を理解するためには、諸言語における多様な二重母音の存在と各言語の母音体系における単母音との関係、それら二重母音の生起と消失に関わる通時的なあるいは共時的な過程、母音体系の推移における単母音と二重母音の関係といった通時的な観点からの考察が必要であり、本研究課題はこれらの観点から二重母音の体系的な研究を試みたものである。

(2) 2005年に発表した論文“A cross-linguistic analysis of diphthongs and diphthongization”において諸言語にみられる二重母音に関する音声的、音韻的特徴について論じた。この論文は、本研究課題の先駆けであり、これらの特徴が普遍的特徴か否かの問題を含めて二重母音と二重母音化の普遍的特徴あるいは類型論的な一般性についての多角的で体系的な研究を目指して、本研究課題に取り組んだ。

2. 研究の目的

本研究課題は、諸言語における多様な二重母音と二重母音化にみられる普遍的特徴と類型論的一般性を共時的および通時的な研究分析によって明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の点があげられる。

(1) 諸言語には多様な二重母音が存在するが、その二重母音を生み出す共時的、通時的音声過程を網羅して、これらに共通する特徴を抽出することにより、二重母音の生起の要因と変化、推移の方向性について解明する。

(2) 二重母音が生じる過程は基本的に二種類に分類することができる。一方は、音声的文脈に起因するものであり、他方は音声的文脈と関係なく起こる二重母音である。後者の二重母音化について、母音が何故二重母音化するのかという問題について諸言語の分析を通して考察する。

(3) 母音が二重母音化する時になぜ特定の二重母音になるのかという問題について、音声と構造の要因から明らかにする。

(4) ケーススタディーとして、個別言語の母音体系の変遷において二重母音がどのように生まれ、変化していったかについて考察分析して、提案した普遍的特徴の妥当性を示す。

(5) 実際に現在進行中の二重母音推移を分析することにより、二重母音の推移の仕方と方向性について考察する。

3. 研究の方法

(1) 二重母音のデータベースの作成を行った。母音体系のデータベースについては、スタンフォード大学とカリフォルニア大学(UCLA)の研究チームをはじめいくつか存在するが、残念ながら、どちらのデータベースでも二重母音はほとんど無視され、母音体系の一部に組み込まれていない。そこで、諸言語におい

て母音体系の変遷に二重母音がいかに重要な役割を果たしてきたということを知るために、二重母音を含む母音体系のデータベースを作成した。

(2) 二重母音に関わる共時的、通時的音声過程の網羅分類をした。本研究の目的のためには、重要なステップとして、二重母音のダイナミックな面を広く知る必要がある。そこで、二重母音に関わる様々な共時的、通時的な音声過程について、できるだけ多くの言語について文献調査し、収集することにより、二重母音と二重母音化に共通する特徴を抽出した。

(3) 二重母音化を引き起こす要因の研究を行う。二重母音の研究において解明すべき重要な問題として、なぜ単母音が二重母音化するのかという問題と、母音が二重母音化する時になぜ特定の二重母音になるのかという問題がある。これらの問題について、いくつかの個別言語の母音体系の変遷の研究を通して解明した。

(4) 現在進行中の二重母音の推移について、ロンドン英語の世代間でどのような違いがみられるかを現地調査によって得た一次データにより分析考察した。

4. 研究成果

(1) 二重母音の多様性と共通性の研究のためのデータベースの作成を行った。本研究課題を開始する前のデータベースに基づく研究を“A cross-linguistic study of diphthongs and diphthongization”というタイトルで北欧英語学会とフィンランド英語学会共催の国際学会にて(2010年6月9日より13日までフィンランドのUniversity of Ouluにて開催)口頭発表を行い、高い評価を受け、学会の多くの人たちと情報交換を行った。そこで、ひとつ改良するべき点としてデータベースに含

む言語の数を増やすことで、二重母音に関する普遍的特徴や類型論の一般性についてより説得力をもつという意見を参考にして、できるだけ多くの言語・方言をデータベースに組み込みこむことにより、二重母音と二重母音化について、より一般性の高い特徴を抽出することができた。

(2) 二重母音に関わる共時的、通時的音声過程の網羅分類をした。すなわち、長母音が二重母音になる二重母音化の過程、短母音が長音化の過程を経て、二重母音になる過程、逆に、二重母音が単母音化する過程、同一言語の異なる方言での二重母音の変異とそれに関わる過程、長短の二重母音とされる音韻的対立に関わる過程、等の共時的、通時的音声過程をできるだけ網羅収集して、二重母音と二重母音化についての普遍的特徴や類型論の一般性についての知見を得た。

(3) 単母音が二重母音化する時のその仕方と二重母音が別の二重母音に推移する時の仕方には、共通点があり、これらの過程はすべて三種類の異化作用として捉えられることを諸言語の具体例により示すことができた。そして、その異化作用の起こり方は音声的要因と構造的要因によって決まる。一例として、ラテン語の歴史で起こったとされる音変化(/e:/ /o:/がそれぞれ/ei/ /ou/と変化したのに対して/E:/ /O:/はそれぞれ/iE/ /uO/となった音変化)について、伝統的には母音のclose/openの区別により二重母音化の仕方が異なるという一般化を提唱しているが、この一般化は妥当なものではない。本研究では諸言語からの事例に基づいて、母音のtense/laxの音声的違いが二重母音の生起の仕方に密接に関わっていることを示した。その他、開口度(aperture)と音色(tonality)が異

化作用としての二重母音化の音声要因として重要な役割をもつことを多くの事例によって示した。また、二重母音化を引き起こす原因として母音推移にみられるような個別言語の構造要因が関与していることを示し、その研究成果を論文にして公表した。

(4)上記の研究成果に基づいて、ケーススタディとして3言語を取り上げて、言語内的証拠による分析を行い、通言語的な意義を考察した。ノルウェー語においては方言差が大きく、古ノルウェー語の長短母音の音韻的対立が単母音と二重母音の対立に置き換えられている現代ノルウェー方言（Setesdal方言）が存在し、類型論的にも興味深い。標準的なAurland方言との対比により、二重母音を含む母音体系の推移にみられる音声的要因と構造的要因を特定できた。さらに、アイスランド語と同様に古西ノルド語を祖とするファロー語（Faroese）を取り上げて、母音体系の変遷を考察し、二重母音がどのように生み出され、変化していくのかという問題について考察分析した論文“The evolution of vowels and diphthongs in Faroese”を発表した。その母音体系の変遷にみられる二重母音化と二重母音の変化について考察分析し、諸言語における二重母音の研究により得られた普遍的特徴や通言語的一般性の知見の妥当性を検証した。さらには、その逆、つまり、普遍的特徴や一般性を踏まえて、古英語におけるi-umlautの音変化が二重母音化を内包する過程として分析されるべきであるという新しい知見をいくつかの内的証拠によって示した。その研究成果を論文として発表した。

(5) 通時的研究では、文献に基づかざるをえないが、近年のコンピュータ機器と音響音声分析ソフトの発達により、現在進行中の音変

化を観察することが可能である。そこで、二重母音の推移について、世代間の違いに着目して、ロンドン英語と一般に呼ばれる方言をもとに分析研究をした。ロンドン地域の英語発音は、伝統的な容認発音とコクニーアクセントが混成したものとされているが、当然のことながら、50歳以上の話者と20歳以下の話者の二重母音の発音に一貫した顕著な違いがみられた。50歳以上の世代にみられる二重母音の発音は、容認発音とコクニーアクセントの混成と言えるものであるが、20歳以下の話者の発音ではきわめて容認発音に近いものに変化してきている。この20歳以下の話者にみられる二重母音の容認発音への回帰は、従来の音韻論の枠に従って、規則喪失として捉えられるが、音変化の可逆性が起こる条件を明確にしない限りは、規則喪失と単純に片づけることはできない。発表論文“Diphthong shift in London English”では、まず、50歳以上の世代にみられる二重母音推移について通言語的観点から分析をした後、20歳以下の話者の発音にみられるような言語変化の可逆性の条件について考察した。その際、ひとつ重要な条件として、音変化が音声的であり、まだ示差的、弁別的ではないこと、回帰変化が無標変化であることなどを挙げた。この音変化の可逆性の問題は非常に重要な問題でもあり、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

<引用文献>

渡部眞一郎、“A cross-linguistic study of diphthongs and diphthongization”、査読無、大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト、2005、pp.49-60

〔雑誌論文〕(計4件)

渡部眞一郎、“Diphthongs and diphthongi-

zation revisited”、査読無、大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト、2011、pp.37-46

渡部眞一郎、“The evolution of vowels and diphthongs in Faroese”、査読無、大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト、2012、pp.45-54

渡部眞一郎、“Old English i-umlaut: As a foot-domain process of diphthongization”、査読無、大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト、2013、pp.69-78

渡部眞一郎、“Diphthong shift in London English”、査読無、大阪大学大学院言語文化共同研究プロジェクト、2014、pp.79-86

6 . 研究組織

(1)研究代表者

渡部眞一郎 (WATANABE, Shinichiro)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号： 90116145